京都産業大学
ことばの科学研究センター
2022 年度 第 2 回研究会

上代の漢文 ー正格と変格ー

森 博達

（ことばの科学研究センター 研究センター員・京都産業大学名誉教授）

「上代」は飛鳥時代から奈良時代までを指す。文章は漢字のみで綴られていた。

漢字文化が日本で受容されると、漢語・漢文の和化も始まる。当時の漢字文は和化の有無・濃淡などによって、正格漢文・変格漢文・漢化和文・和文に四分できる。変格漢文には、朝鮮変格漢文や仏教漢文の要素も混在する。

今回はまず、前史として古墳時代の埼玉稲荷山鉄剣銘から始め、飛鳥時代の「三経義疏」、奈良時代前半の『古事記』『日本書紀』および「風土記」を取り上げて概説し、多様な文章の性格を評定する。

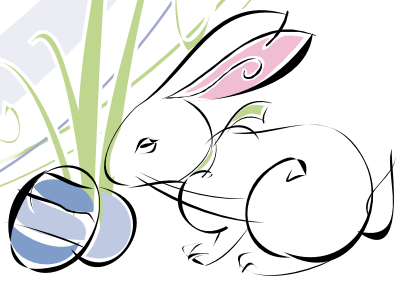
つぎに、奈良時代後半の『懐風藻』(751 年序)・『藤氏家伝』(760 年頃)・『唐大和上東征伝』(779 年)を取り上げて、やや詳しく文章を検討し、倭習や仏教漢文を摘出する。

『藤氏家伝』の上巻「鎌足伝」(仲麻呂撰)は『日本書紀』を参照しており、決定的な誤用（倭習）まで襲っている。また下巻「武智麻呂伝」（延慶撰）ともども仏教漢文が混在する。「東征伝」（元開＝淡海三船撰）は基本的に平易な正格漢文で綴られているが、倭習や仏教漢文も混じる。『藤氏家伝』と『東征伝』は今回が初探であるが、当時の漢文作成の水準や性格が窺えて興味深い。

2022 年 6 月 29 日（水）15:00～17:00

第三研究室棟三階会議室

および Teams によるオンライン開催



オンラインによる参加の場合のみ、下記へメールでお伝えください。

発表時の Teams に登録いたします。

center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp （ことばの科学研究センター）